

# スミス再生産論と社会認識（下の1）

野 沢 敏 治

7. 生産的労働の認識視座（本号）
8. 蓄積と拡大再生産—国家論を展望して—

## 7. 生産的労働の認識視座

前稿の結論はこうであった。社会は生産手段生産部門と消費手段生産部門との2部門で構成され、その社会の総労働が社会全体に必要な消費物資を年々再生産する。また、スミスはケネーの「狭隘」を批判しながらも、消費可能な物を年々再生産する労働が生産的労働だということを、自己の再生産論構築のなかでケネーから学びとっていた。この生産的労働規定はスミスのものとしては一見して重農主義的である。ケネーにとって「真理」であるこの生産的労働規定はいかにしてスミスにとっても真理であったか。改めて問う。なにを、どのようにして生産すれば、それは生産的労働か。

従来の研究史が確認してきた生産的労働の規定は、大きくいって、二つある。第1規定が剰余価値生産労働、第2規定が商品生産労働。ところで問題は両規定の外見的矛盾を突いたり、どちらか一方のみを正しいと裁断することではなく、両規定を併存させる理論上の共通視座をつかむことにある。これまでの内在的スミス研究者によってつかまれた共通視座は再生産であり、生産資本循環<sup>(1)</sup>であった。本稿の課題はこの再生産視座にのっかってさらに生産的労働把

(1) 内田義彦『増補・経済学の生誕』（未来社、1962年）後編・「六、資本の蓄積と再生産の理論二」、富塚良三『蓄積論研究』（未来社、1965年）前編第1章第3節「生産的労働論」。なお、ケネー研究はケネー生産的労働論の認識視座が再生産にあることを教えてくれる。平田清明『経済科学の創造』（岩波書店、1965年）後編第1部第2章第2節「生産的労働の二重規定」。

握をかためることにある。そのばあいにとくに注視されるべきものが第2規定である。第2規定は資本制社会の歴史的形態把握からすれば誤まりで現象記述的である、と卑しめられることが多い。それでよいだろうか。また、前稿までの社会的再生産過程研究をふまえるならば、スミス生産的労働は新たに規定しなおされて資本制社会の全体把握につながるものを呈示するだろう。生産的労働論は社会的規模での蓄積と拡大再生産の把握に継続する内容をもつ。<sup>(2)</sup>

スミス生産的労働論の解説にはいるまえにその解説の必要条件として、つぎのことを検討する。重商主義と重農主義の先行諸学説は富と生産的労働をどのように規定したか。スミスは両学説を批判的に摂取して富と生産的労働についての古典的・近代的概念を作りあげるのだが、その批判的摂取のさまはいかにあったのか。これまでスミス生産的労働論はケネーとの対立または依存関係においてのみ検討されることが多かった。だが、スミスのケネーからの批判的摂取の深さを知るためにも、まず、これまであまり検討されることのなかったスミスと重商主義生産的労働論との関係を略述する。

#### (1) 重商主義から学んだこと

スミスが本来的に対立する重商主義は17世紀市民革命後の議會制的重商主義である。重商主義国家の全体目的は他国を経済的にあるいは政治軍事的に制覇することであった。重商主義者は、一般に、その全体目的を達成するのに適合した形態の富を国富とみなし、国民が個人的に必要とする形態の富を国富とはみなさなかつた。重商主義者は国民的剰余の一般的価値形態に眼を奪われ、その価値形態をもたらす国内の特殊生産部門の労働に関心を集中させた。重商主義にとっての国富は終局的には金銀貨幣形態の価値であり、金銀貨幣を一国内にもたらすことに貢献する労働のみが生産的労働である。17世紀から18世紀にかけてのイングランドで国家的に生産的労働であったのは、輸出適合的商品を生産する毛織物・絹織物業労働であった。それら特殊生産部門が排他的に

(2) 生産的労働が論じられるのは第2篇再生産論のなかの第3章においてである。第3章の標題はなんであったか。「資本の蓄積について、すなわち、生産的労働と不生産的労働について」である。

ナショナル・インダストリ

国民的産業の名を独占していた。毛織物産業労働者は国産原料の羊毛に加工仕上労働を加えて対象の価値を増大させる。増加価値には労働者の生活維持費以上の剰余価値がふくまれており、その増加価値をふくむ完成工業品は国外消費者から購買されて価値実現される。毛織物産業は生産に消費した価値よりも多くの追加的価値を貿易において支配できる。順の貿易差額、世界貨幣が増加価値の重商主義的形態であり、貨幣的富の源泉は国内熟練労働者の技巧労働とされる。重商主義者は貨幣的富の生産源泉に心を集中し、その分配には注意をむけなかった。かれらは国富の創造者が低賃金で困窮することに関心をもち、国富創造労働を国家の手で育成することのほうに注意をむけた。<sup>(3)</sup>

ウィリアム・ベティの次の文言が重商主義の富と生産的労働にかんする見解を示している。

「一般に見うけられることであるが、各国は、その国産品の製造によって繁栄するものであって、イングランドの毛織物・フランスの紙・リエージュの鉄器・ポルトガルの菓子・イタリアの絹がすなわちこれである。……産業の偉大にして終局的な成果は、富一般ではなくて、とくに銀・金および宝石の豊富である。銀・金・宝石は、腐敗しやすすくないし、また他の諸物品ほど変質しやすくもなく、いついかなるところにおいても富である。ところが、ぶどう酒・穀物・鳥肉・獣肉等々の豊富は、そのときその場かぎりの富にすぎない。それゆえ、その国に金・銀・宝石等々を貯蔵せしめるような諸物品を産出すること、またそのような産業に従事することは、他のいずれよりも有利である。そして海員の労働および船舶の運賃というものは、つねに一種の輸出品なのであって輸入額をこえるその余剰は、本国に貨幣等々をもたらすのである。<sup>(4)</sup>」

(3) 重商主義の生産的労働を一般的に研究した重要文献は次のものである。E. S. Furniss, *The Position of the Laborer in a System of Nationalism*, Boston, 1920. また、次のものも示唆に富む。P. J. Thomas, *Mercantilism and the East India Trade*, London, 1926. E. A. J. Johnson, *Predecessors of Adam Smith*, New York, 1965 (とくに、chapter XII, Land and Labor, chapter XIII, "Art" and "Ingenious Labour")

(4) ベティ、大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波書店、1955年、48-50頁。引用文中の傍点は筆者のもの。以下ことわりのないかぎり同様。T・マン、J・チャイルド、C・ダヴナント等の東インド会社の自由貿易論者も国内産業に国富の源泉があることを認めている。マン、張漢裕訳『外国貿易によるイギリスの財宝』岩波書店、1942年、36頁。ダヴナント、田添京二・渡辺源次郎訳『東インド貿易論』東京大学出版会、1966年、130頁。

スミスは以上の重商主義を批判するにあたって、まずそのなかに埋もれている科学的核心を洗いだす。洗いだされたことはつぎのことである。富は消費可能な財貨一般にもあり、生産的労働は商工業にのみ限定されるがそこでの増加価値形成労働である。「商業に関するイングランドの最優秀な著述家たちのなかのある人々」の見解は不徹底で狭いけれども、スミスはその偏狭さのなかにひそむ真理を見逃がさない。

「商業に関するイングランドの最優秀な著述家たちのなかのある人々は、一国の富はその金銀だけにはなくて、その土地、家屋およびありとあらゆる消費財にもある、と述べながら発足する。」「工匠と製造業者は、世人のふつうの理解ではその勤労が土地の粗生産物の価値をひじょうに増加させることになっている。」<sup>(6)</sup>

だが、ペティの発言にもみられるように、市民社会分析を再生産論にまで深化させることのなかった重商主義は、生産的労働を流通の表象において総括せざるをえなかった。「ところが、かれらの推理をすすめてゆくうちに、土地、家屋および消費財はいつのまにか忘れられてしまうように思われるのであってかれらの議論の調子からいうと、いっさいの富は金銀にあり、これらの金属を繁殖するのが、ナショナル・イングストリ国民の工業や商業の大目的だ、と想定していることがしばしばある。」<sup>(7)</sup>だからスミスは、商業主義的重商主義者トマス・マンの貿易差額論をもって重商主義を代表させるのである。<sup>(8)</sup>

## (2) 重農主義から学んだこと

重商主義の生産的労働は商工業部門の資本制的賃労働であり、それは普遍的

(5) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Ed., by R.H. Campbell and A.S. Skinner. Vol. 1, Clarendon Press, Oxford, 1976. (以下 *WN* と略す) p. 450. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』I, 岩波書店, 1969年, 672頁。なお、訳文は必ずしも大内訳には従わない。この引用文にしめされた見解はマン、ダウナント、ペティ、J・スチュアート等にみいだされる。

(6) *WN*, Vol. 2, p. 666. 邦訳, II, 981頁。

(7) *WN*, Vol. 1, p. 450. 邦訳, I, 672-673頁。

(8) このことについては次のものが参照されるべきである。羽鳥卓也『古典派経済学の基本問題』（未来社, 1972年）の「補論I アダム・スミスと重商主義」

価値形態をとった剰余価値を生産する。経済学史のなかでこの重商主義的生産労働を最初に批判したのは重農主義である。その批判はさしあたってはまったく対極的な立場からなされている。重農主義の生産的労働は農業部門の資本制的賃労働であり、それは農産物形態をとった剰余価値を生産する。剰余価値の一特殊形態である地代、穀物剰余で表現される純生産物、これを生産する特殊農業労働のみが生産的労働であるとされる。

重農主義の始祖ケネーは言う。

「国民は市民の三階級、すなわち生産階級、地主階級および不生産階級に分たれる。生産階級とは、土地の耕作によって、国民の年々の富を再生させ、農業労働の支出の前払を行い、且つ年々、土地の所有者の収入を支払うところの階級である。……地主階級は、主権者と土地の所有者と十分の一税徴収者とを含んでいる。この階級は、生産階級が年々再生させる再生物の中から、その年前払を回収し、その経営の富を維持するに必要な富を控除した後、この階級が地主階級に年々支払うところの収入、すなわち耕作の純生産物によって生活するのである。不生産階級は、農業以外の勤労および労働に従事し、その支出が生産階級および地主階級によって支払われる。すべての市民から形づくられる。……不生産階級は、その加工品に使用した原料の購入のために、はじめ生産階級に支出したその前払の回収として、この金額を取返すのである。かくしてその前払は、何物をも生産しない、この階級はそれを支出し、この支出分はこの階級に取返され、そしてつねに、年々歳々引きつづき保存されるのである。」<sup>(9)</sup>

「もし地主が、彼らの土地を改良し、彼らの収入を増加するために、不生産階級に対してよりも多くを生産階級に支出するならば、生産階級の労働に用いられる支出のこの増加分は、この階級の前払の追加と見られるべきであろう。」<sup>(10)</sup>

(9) *Oeuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay*, publiées par Auguste Oncken, Francfort S/M et Paris, 1888. pp. 305-310. 坂田太郎訳『ケネー『経済表』』春秋社、1957年、132-135頁。(○印は原文でのイタリック体)

(10) *Ibid.*, p. 316. 同訳、144頁。(○印は原文でのイタリック体)

「主権者と国民とは、土地が富の唯一の源泉であること、富を倍化するのには農業であること、を決して忘れないこと。」<sup>(11)</sup>

スミスは以上のケネーの生産的・不生産的労働論、蓄積論、土地＝富の源泉論に批判をくわえる。だがスミスの批判は、彼の重商主義批判がそうであったように、またそれとは比較にはならない程度に、偏狭の背後にひそむ一般的真実を顕現させることにある。スミスのケネー批判は、ケネーに対する外的対立である以上に、ケネーからの内的摂取である。スミスはケネーから重商主義批判の基本手法である生産の構想を教わるのである。スミスとケネーとのかわりあいということで検討すべき論点は種々あるが、<sup>(12)</sup>ここではスミスによるケネー生産的労働論の紹介と批判のありかたに分析の重点をおいて、スミス生産的労働論の理論的位相を探ることに努めたい。スミスがケネーを対象としているところは、『国富論』第4篇第9章、「農業の諸体系について、すなわち、土地生産物をあらゆる国の収入および富の、唯一または主要な源泉と主張する経済学の諸体系について」である。

まず、この章でスミスはケネーをいかに「紹介」しているか。それはケネー学説の忠実な再現というよりも、スミスの眼からみたケネーであり、ケネーからの積極的摂取である。<sup>(13)</sup>紹介という形式をかりてスミスが学びとったことは、ケネー生産的労働のブルジョア的性格であり、生産的労働論はおよそ再生産論次元で把握されるべきだということである。

農産物形態をとってはいるが剰余価値を創造するものは、土地・自然ではな

(11) *Ibid.*, p. 331. 同訳, 167頁。(○印は原文でのイタリック体)

(12) 自然法のとらえかたで両者は対立する。スコットランド人スミスは自然法を人間の行為と歴史をふまえたうえで、そして歴史に内在することをつうじて認識しようとする。ケネーの純理的・超絶的自然法に比較すればスミスのそれは歴史的・経験的自然法である。しかし、スミスの「体系の人」批判は本来ケネーにのみむけられたものであろうか。1790年『道徳感情論』第6版で展開される「体系の人」批判はスミスの生涯のテーマである重商主義批判と十分にかかわらせるべきであり、彼じしんの立法者像・国家論との連なりにおいて理解さるべきであらう。この点の展開は後日に期す。

(13) 参照、平田清明「スミスの重農主義批判」（高島善哉編『古典学派の成立』・経済学説全集第2巻、河出書房、1954年に所版）。

く、農業賃労働者の労働である。

「本来地主に帰属すべき地代は、総生産物すなわち全生産物をつくるためにあらかじめ支出されるべきいっさいの必要経費〔一創業資本と年々の運転資本〕を、もっとも完全なしかたで支払ったそのあとにのこる純生産物にほかならない。この体系において、この階級の人々が生産的階級という名誉ある名称によってとくに区別されているのは、耕作者の労働が、これらのいっさいの必要経費を完全に支払ってなおそのうえに、この種の純生産物を提供するからである。」<sup>(14)</sup>

スミスが紹介するケネーは、自然ではなく人間労働を、物的にではなく価値的に剰余の価値を生産するブルジョアの労働を、純生産物の人間的源泉とみなす。そのケネーは、また農業にのみでなく工業にも、実は、ブルジョア的生産的労働の存在を認めている。重商主義にひそむ内的真実をケネーは共有する。

「工匠と製造業者の労働は、土地の粗生産物の年々の総量の価値になにものをも付加しない。なるほど、それはこの粗生産物のある特定部分の価値を大いに増加させはする。けれども、この労働がそれまでのあいだに他の部分でひきおこす消費は、それがこのある特定部分に付加する価値と正確に等しいから、その総量の価値は、その期間中のどの一瞬間においても、この労働によってすこしも増加されないのである。」<sup>(15)</sup>

上の引用文は工業労働が不生産的労働だということを説明する文脈であるが、とにかくケネーは、工業労働が賃金に等価以上の価値を直接的生産過程で生産することを知っている。スミスはそのことをケネーから発掘する。(ケネーが重商主義と共有するのは直接的生産過程における工業労働の剰余価値生産ということであって、もちろん、かれは、重商主義者のように工業労働者が価値的に「もっとも生産的とみなされている人々」<sup>(16)</sup>だとは考えない。) もっとハッキリと言っているところを引用しよう。

「[ケネーの体系では] かれら [工匠と製造業者] の労働は、かれらを雇用

(14) WN, Vol. 2, pp. 665-666. 邦訳, II, 979-980頁。

(15) WN, Vol. 2, p. 667. 邦訳, II, 982頁。

(16) WN, Vol. 2, p. 666. 邦訳, II, 980頁。

する資財だけをその通常の利潤とともに回収するにすぎない、といわれる。<sup>(17)</sup>

ケネーの「不生産的労働」は直接的生産過程に視点を向けば形態的に正しく握把されている。それにもかかわらず、なぜケネーは剰余価値を生産する工業労働を不生産的だといいはるのか。工業労働＝不生産的労働が妥当する理論視座はなにか。なにを生産すればそれは生産的なのか。工業労働＝不生産的労働という文脈の前掲引用文にもどって、傍点をつけられていない文章に注目しよう。そのうえで、次の引用文の傍点箇所に着目すれば、ケネー生産的労働論の認識視座が透けてみえるだろう。

〔「工匠および製造業者を雇用する」この資財は、かれらの雇主によってかれらに前払いされる原料、用具および賃銀であり、またそれはかれらを使用し維持することになっている元本である。そしてその利潤は、かれらの雇主を維持することになっている元本である。かれらの雇主は、かれらを使用するのに必要な原料、用具および賃銀からなる資財をかれらに前払いするように、自分の生活を維持するのに必要なものを自分自身にも前払いするのであって、かれは一般にこの生活維持費を、かれがかれらの所産の価格からあげられると期待する利潤に比例させる。……それゆえ、製造業の資財の利潤は、土地の地代とは異なり、利潤をえるために支出されなければならぬ全支出を完全に払いもどしたあとにのこる純生産物ではない。……それゆえ、工匠や製造業者を使用し維持するのについやされる支出は、もしこういつてさしつかえないなら、それ自体の価値の存在を継続させるだけであって、新しい価値はすこしも生産しない。したがって、それはまったく不妊的で不生産的な支出である。<sup>(18)</sup>〕

つまり、こういうことである。工業部門へ移った「土地の粗生産物の年々の総量」は、工業労働者によって加工される原料と、工業労働者・資本家によって消費される食料とからなる。工業労働は生産過程で原料の価値を増大させる。それは賃金と利潤の価値に等しい価値だけ増大させる。ところで、労働者も資本家も、加工品を完成させるまでは、生産にたずさわらねばならぬととも

(17) WN, Vol. 2, p. 666. 邦訳, II, 981頁。

(18) WN, Vol. 2, pp. 666-667 邦訳, II, 981頁。



に、個人的消費生活をせねばならぬ。労働者の賃金が生活維持費であるのとおなじく、資本家の利潤も生活維持費として全額個人的に消費される。直接的生産過程で生産された価値に等しい額の食料が消費される。当年度に生産された追加価値は当年度に個人的に消費される所得価値に等しい。これは年度進行のなかでは単純再生産を意味する。単純再生産過程では年々に投下される資本価値（賃金価値+原料価値+年度中に消費される道具価値）の大きさは不変であるから、この事態をみて、ケネーは、工業労働は「それ自体の価値の存在を継続させるだけである」と言うのである。そして、単純再生産過程での工業部門の利潤は蓄積元本とはならず消費元本にくりいられるから、この事態をみて、ケネーは、工業労働は「新しい価値はすこしも生産しない」と言うのである。

ケネーは生産的労働を規定するにあたって、直接的生産過程から流通・消費をふくむ再生産過程の場にまでその視野をひろげて観察する。資本化されるべき剰余価値を生産する労働、蓄積と拡大再生産の過程内での労働、これがケネー「生産的労働」の内実である。現実には剰余価値を生産してもそれが資本化されない単純再生産過程内での労働、資本を生産しない労働、これがケネー「不生産的労働」の内実である。スミスは利潤に本来的蓄積元本をみいだす。この点で彼は地代を本源的蓄積元本とみなすケネーと対立するが、およそ生産的労働は再生産過程のなかで把握すべきだという発想そのものはケネーから学ぶのである。価値を価値形成の論理次元にとどめずに、その創造・消費・流通という過程的運動のなかでとらえなおす、この視座をスミスはケネーから学ぶのである。このことはスミスのケネー批判の箇所でもより明瞭になり、スミス生産的労働論の本論で再確認されるだろう。

以下、スミスのケネー「批判」にはいる。批判は「この体系の主要な誤謬」とされた商工業階級=不生産的階級論に集中し、それは5つの論点にわたって展開される。内容的には以下の3つに整理される。

#### (i) 蓄積元本の確定

スミスは産業利潤一般をケネー的「純生産物」とみなし、利潤を拡大再生産

のための蓄積元本にくりいれるべき主要なものとなす。再生産の規模は、ケネーのように、地主が地代収入を生産階級・不生産階級にどのような割合で消費支出するかということでは決定されない。それは、産業資本家階級が利潤をどんな割合で収入と資本に分割するかということで決定される。利潤こそ蓄積の本来的ファンデであり、利潤を資本に転化させる「節約」行為は資本家階級一般にまで拡大される。以上のことはケネー批判の第4の論点で示される。

「第4に、農業者や農村労働者でも、節儉をしないかぎり、実質的収入、つまり自分たちの社会の土地と労働の年々の生産物を増加させることができないが、それは工匠、製造業者および商人のばあいと同じである。ある社会の土地と労働の年々の生産物はつぎの二つの方法のいずれかによってのみ増加させるるのであって、すなわち第一に、その社会で実際に扶養されている有用労働の生産諸力を多少とも改善するか、または第二に、この労働の量を多少とも増加するか、そのいずれかによってである。……ある社会内で実際に雇用されている有用労働の量の増加は、それを雇用する資本の増加にまったく依存せざるをえないし、またこの資本の増加は、この資本の使用を管理し指揮する特定の人々か、またはこれらの人にそれを貸付ける他の人々かのいずれかが、収入のなかから貯蓄するその額に正確に等しいにちがいない。<sup>(20)</sup>」

(ii) 「商品」生産労働としての生産的労働

ケネー批判の第1から第3の論点にわたって、スミスは、自分が紹介したケネーの生産的労働把握を再確認するとともに、ケネーとは異なる新たな生産的労働規定をおこなう。はじめにスミスは、資本価値（+前払利潤価値）存続労働は生産過程では増加価値生産労働であると反論する。だが、すでに明らかであるが、この反論は批判の名によるケネーへの実質的依存である。

「第1に、この階級がそれ自身の年々の消費の価値を年々に再生産し、この階級を維持し使用する資財または資本の存在をすくなくとも継続させる、とい

(19) 農業利潤を蓄積元本とする視点はケネーにもある。「原前払の利子」部分がそれである。Cf., Quesnay, *ibid.*, pp. 313-314. 前掲坂田訳, 139-141頁。参照, 平田『経済科学の創造』511-515頁。

(20) *WN*, Vol. 2, pp. 676-677. 邦訳, II, 994-995頁。

うことはみとめられている。ところが、この理由だけからしても、不妊的とか不生産的とかという名称がこの階級に対してきわめて不適切に用いられているように思われるのである。……なるほど、農業者と農村労働者はかれらを維持し使用する資財に加えて、純生産物、つまり地主への自由地代を年々に再生産する。……農業者と農村労働者の労働のほうが、商人、工匠および製造業者のそれよりもたしかにより生産的である。それにしても、いくら前者の階級の生産が卓越しているからといって、後者の階級が不妊的また不生産的だということにはならない。<sup>(21)</sup>

「第3に、どう考えても、工匠、製造業者および商人の労働がその社会の實質的收入を増加しない、というのは不適切のように思われる。……たとえば、収穫後最初の6ヶ月間に10ポンドに値いする仕事をなしとげる一人の工匠がいるとして、たとえかれがこれを同一期間に10ポンドに値いする穀物その他の生活必需品を消費するにしたところで、それでもなお、かれはその社会の土地と労働の年々の生産物に10ポンドの価値を現実に付加するのである。かれが穀物その他の生活必需品という10ポンドに値いする半年分の収入を消費していたあいだに、かれは、自分かまたは他の人かのいずれかのために、同じく半年分の収入を購買しうる等価値の所産を生産したのである。<sup>(22)</sup>

スミスがおさえた事態は次のようになる。いま、価値の生産と価値の消費とを時間的に分けて過程的に示せば、

$$\left. \begin{matrix} A \\ P_m \end{matrix} \right\} P \dots W' \left\{ \frac{W}{w} \frac{G}{g} \right\} \left\{ \frac{G-W}{g-w} < \frac{A}{P_m} \right\} P. \quad \text{この } P \dots P \text{ 循環のなか}$$

では投下された資本価値は生産的に消費されたり、生産過程とは別の生活過程で個人的に消費されたりするが、消費されればなしにされるのではなく、それと等量の価値が不断に再生される。ケネーにもあったこの認識に内在するかぎり、不滅の価値を生産する生産的労働は新たな装いをもってスミスの眼に映る。

「第2に、以上の理由から、工匠、製造業者および商人を召使と同一視する

(21) *WN*, Vol. 2, pp. 674-675. 邦訳, II, 992頁。

(22) *WN*, Vol. 2, p. 675. 邦訳, II, 993頁。

のはまったく不適切であるように思われる。召使の労働は、かれらを維持し使用する元本の存在を継続させない。かれらを維持したり使用したりするのは、まったくかれらの主人の経費負担においてなされるのであって、かれらがおこなう仕事はこういう支出を払いもどすような性質のものではない。この仕事は総じてかれらがそれをおこなうまさにその瞬間に消滅してしまうようなサービスであり、かれらの賃銀や生活維持資料の価値を回収しうるような、販売しうるなんらかの商品にみずからを固定したりまたは実現したりするものではない。これに反し、工匠、製造業者および商人の労働は、当然このような販売しうるなんらかの商品にみずからを固定したり実現したりする。〔——だから商工業労働は生産的労働なのだ！〕<sup>(23)</sup>

ケネーにあっては、単純再生産過程内での商工業労働は蓄積元本にはいるべきものを雇主に払戻すことを当然にしないのだから、商工業労働が主人の経費を払戻さない召使労働と同一視されるのも一理ある。しかしスミスは利潤一般を主要蓄積元本にするのだから、利潤を生む商工業労働はそれじたい潜在的に資本生産的労働である。これにたいして召使のサービス労働は、収入と交換されるから、主人にとっての使用価値（物的または非物的な）を生産することはあっても、価値を生産することはない。そこで、価値の不滅的運動を表現する「前払」—「払戻」の再生産視座から召使労働をみれば、それは「総じてかれらがそれをおこなうまさにその瞬間に消滅してしまうようなサービス」として特徴づけられる。これと対比的に、単純再生産過程内での商工業労働は「かれらの賃銀や生活維持資料の価値を回収しうるような」ものを実的に生産する。単純再生産過程内での生産的労働はたんなる物質やたんなる商品を生産する労働ではない。それは、資本価値の不滅的運動の客観的实在性を経験的に表象するものとしての「商品」、あるいは自己増殖する価値という資本の運動を単純再生産の論理次元で物的に表示するものとしての「商品」、そのような「商品」に自己実現をみいだす労働である。これは後のスミス生産的労働論の本論であられる第2規定である。第2規定は、理論的には直接的生産過程よりも次元の高い再生産過程の視座からする生産的労働規定である。

(23) WN, Vol. 2, p. 675. 邦訳, II, 992 - 993頁。

## (iii) 有用労働としての生産的労働

生産的労働は他の生産的労働との交通関係では有用労働である。商品交換を媒介にした社会的分業と社会的再生産構造に眼をおけば、価値形成の生産的労働は社会的に生産力を増大させる有用労働となる。有用労働としての生産的労働、この規定は従来無視されがちであった第5論点にかかわるものである。

ケネーは農工分業の社会関係を資本・賃労働関係に擬制させる。<sup>(24)</sup> スミスが紹介するケネーは言う。

「不生産的階級、つまり商人、工匠および製造業者の階級は、まったく他の二つの階級、つまり土地所有者階級と耕作者階級の経費負担において維持され使用される。これらの二つの階級は、不生産的階級に、その仕事の原料とその生活資料の元本を供給し、この階級がその仕事に従事しているあいだに消費する穀物や家畜を供給する。けっきょく、土地所有者と耕作者は、不生産的階級のすべての職人の賃銀と、かれらのすべての雇主の利潤との双方を支払うのである。これらの職人とかれらの雇主とは、適切にいえば土地所有者と耕作者の使用人である。」<sup>(25)</sup>

これにたいしてスミスにあっては、資本・賃労働関係は農工各部門内に成立しており、農工両部門の資本家が投資の主要主体である。そして、蓄積の主要元本は地代から利潤一般に移される。だからスミスの農工分業は、農業が工業にたいする一方的な資本・賃労働関係ではなく、自立する各産業部門が商品交換をつうじて相互に依存しあう市民関係である。この市民関係にはいつてゆく各産業部門の生産的労働は、相互に生産力を高めあう有用労働となる。この有用労働という認識をスミスはケネーから摂取する。スミスが紹介するケネーは言う。

「それにもかかわらず、不生産的階級は、他の二つの階級にとって有用どころか大いに有用である。土地所有者や耕作者は、商人、工匠、および製造業者

(24) おなじ資本・賃労働関係をスミスはケネーの農業国・商業国関係にみだしている。Cf., *WN*, Vol 2, pp. 670. 邦訳, II, 986頁。

(25) *WN*, Vol. 2, p. 668. 邦訳, II, 984頁。

の勤労のおかげで、自分たちが必要とする外国財貨でも自国の製造品でも購入することができるのであって、しかもそのばあい、自分たちが使用するためにみずから不手ぎわで未熟なしかたでそれらを輸入したり製造したりしようとするれば使用せざるをえない自分たちの労働量よりも、はるかにすくない労働量の生産物で、それらを購入することができる。不生産的階級のおかげで、耕作者は、……わき目もふらずに耕作する結果としてかれらがもたらす卓越した生産物は、不生産的階級を維持し使用するために、土地所有者または自分たちがついやす支出の全額を十分に支払うことができる。商人、工匠および製造業者の勤労は、たとえそれ自体の性質においてはまったく不生産的だとはいえ、こういうしかたで、土地生産物の増加に間接に寄与する。それは、生産的労働を土地の耕作というその本来の仕事に専念させておくことによって、生産的労働の生産諸力を増加させ、その結果、農耕は、それとはもっとも縁の遠い人の労働のおかげで、しばしばよりたやすく、しかもよりよくおこなわれる、ということになるのである。<sup>(26)</sup>

交換関係は一つの生産力をしめす。ケネーからその事を撰取したうえでスミスがおこなった事は、有用労働の性格を農業階級にも認め、有用労働としての生産的労働の規定を一般化したことである。ケネー批判の最後の論点でスミスは言う。

「第5に、そして最後に、たとえこの体系が想定していると思われるようにあらゆる国の住民の収入は、まったくかれらの勤労が調達しうる生活資料の量だという想定にたつてさえ、貿易国と製造業国の収入は、他の事情にして等しいかぎり、貿易または製造業のない国のそれよりも、つねにずっと大きいにちがいない。ある特定国は、貿易や製造業のおかげで、自国の土地がその耕作の実情において提供しうるよりも大量の生活資料を年々に輸入できるからである。都会の住民は、たとえ自分の土地を全然もたぬことがしばしばあっても、自分たちの勤労のおかげで、自分たちの仕事の原料ばかりか生活資料の元本までも供給するほどの量の、他の人々の土地粗生産物を自分のところにひきよせ

(26) WN, Vol. 2, p. 669. 邦訳, II, 984-985頁。

る。」<sup>(27)</sup>

そして、つぎのようにスミスは断言する。「都会の住民と農村の住民とは、たがいがたがいの使用人である。」<sup>(28)</sup>

「両者の利得は、相互的であり互恵的でもあるのであって、このばあいの分業は、他のばあいと同様、労働が細分されたいろいろの職業に従事するありとあらゆる人にとって有利なのである。」<sup>(29)</sup>

以上、ケネーから批判的に摂取したことを、スミスは自分自身の生産的労働把握で積極的に生かす。生産的労働は再生産過程で、しかも社会的再生産過程において把握されねばならない。

### (3) 価値形態的富の批判と再生産論

スミス生産的労働論にはいるまえにもう一つ検討することがある。それは、富と経済的価値のありようをスミスはいかにとらえたかということである。ケネーから再生産視座を学んだスミスには富はいかなるものとして存在するか。

富は、重商主義的な耐久財や貨幣（貴族的な価値形態）に固定されない。また、富は、重農主義的に、農産物の大衆の消耗品にも限定されない。富の幻想的または感覚的な形態をはぎとって、価値物にも使用価値物にも偏しない富のかたちをもとめること、これがスミスの経済学史的課題であった。彼が見つかった富は価値物と使用価値物の結合である商品、これである。価値形態や自然形態にとじこめられた富ではなく、富そのものとしての商品的富、この富を生産的労働は生産する。だから、商品の性格を厳密におさえることがスミス生産的労働論を理解するために必要となる。研究対象は第4篇第1章、「商業の体系、すなわち重商主義体系の原理について」である。この章でスミスは商品論の歴史的反省をしている。

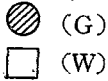
16世紀のスペイン・ポルトガルは、新大陸アメリカに金銀山を所有し、国内

(27) WN, Vol. 2, p. 677. 邦訳, II, 995頁。

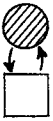
(28) WN, Vol. 1, p. 378. 邦訳, I, 586頁。

(29) WN, Vol. 1, p. 376. 邦訳, I, 583頁。「序論と本書の構想」で「有用で生産的な労働者」と規定されていることに注目せよ。遊部久蔵はこの規定をスミスの第3の規定とし、そこにスミス経済学の根本特質を理解するためのカギをもとめている。同氏『古典派経済学とマルクス』（世界書院, 1955年）20 - 28頁。

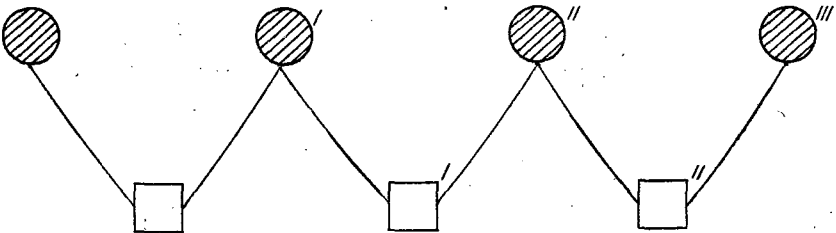
産業とは無縁な外国貿易によって富をえようとした。両国の政府は、植民地や外国貿易から獲得した金銀が国外に流出しないように金銀輸出禁止策をとる。両重商主義国にあっては、貨幣と商品とはまったくの別ものであり、価値は貨幣にのみある。



国内産業の利害を多少とも反映した商業国段階にすすむと、貨幣と商品は別ものであるにしても、両者は交換関係にはいる。貨幣は外国品を購入するための金銀となる。



金銀輸出自由の政策をとる商業国段階にはいると、商業国は国内の金銀を輸出して外国商品を輸入し、国内で消費される以上のそれを再輸出する。輸出—輸入—再輸出の外国商業流通（—このなかに国内産業の産物の流通があるていど組みこまれる）の結果、輸入価値額よりも多い輸出価値額の差額が貨幣形態をとって国内に蓄積される。富は金銀に孤立させられることはなくなったが、しかし、外国商業流通は富を金銀形態で表象させる。



重商主義が17世紀前半の全般的貿易差額説段階から、17世紀末以降の個別貿易差額説段階になると、国内産業と結びついた外国商業のみが発展を許される



ようになる。<sup>(30)</sup> 国内産業の生産物じたいが十分な貨幣獲得力もちうるまで、国家は生産者保護の諸政策を遂行する。しかし、結局、国富は貿易差額・貨幣で総括され、商品じたいに貨幣を視るまでに至らない。<sup>(31)</sup>

これにたいしてスミスは、18世紀イギリス産業資本の成長を背景にして、商品に貨幣が内属することをしっかりとおさえた。彼は、交換価値の自立的な現象形態にまどわされず、交換価値の機能・その内面的性格そのものに視点をおく。貨幣が独占していた交換価値・購買力という経済的支配力・貨幣性格は、商品であるかぎりのあらゆる商品の内に発見される。

「自国にぶどう園のない国がぶどう酒を諸外国からとりよせるのと同じように、自国に鉱山のない国はもちろん金銀を諸外国からとりよせなければならない。それにしても、政府の注意が前者の対象よりも後者のそのほうへ、より多くむけられる必要があるとは思われない。ぶどう酒を買う手段をもつ国はいつでも必要とするぶどう酒を獲得するであろうし、また金銀を買う手段をもつ国がこれらの金属に不足することもなからう。金銀は、すべての他の商品と同じように、一定の価格で買えるし、それらがすべての他の商品の価格であるように、すべての他の商品もまたこれらの金属の価格なのである。」<sup>(32)</sup>

商品は貨幣であり、貨幣は商品である。商品は貨幣のたんなる購買対象ではなく、それじしんが貨幣を購買しうる主体・「金銀を買う手段」である。また、どんなにみずばらしい姿の商品でも、それは「それら〔金銀貨〕とひきかえにあたえるべきもの」<sup>(33)</sup>であるから、商品は貨幣とおなじく等価物の位置にたつ。逆に、貨幣はそれじたいが商品とおなじく購買されうる一対象であり、諸商品によって価値評価される一対象である。貨幣はカトリック的司祭の地位からプロテスタントの平信徒の地位にまでひきずりおろされる。スミスにあっては

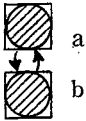
(30) スミスは自分の批判する重商主義が資本としての貨幣をもとめる重工主義であることを、また、重商主義者のなかには富を貨幣以外にみいだした者がいることを、知っている。Cf., *WN*, Vol. 1, pp. 437-438, 450, 430-431. 邦訳, I, 655-656, 673, 645-646頁。

(31) Cf., *WN*, Vol. 1, pp. 449-450. 邦訳, I, 672-673頁。

(32) *WN*, Vol. 1, p. 435. 邦訳, I, 652頁。

(33) *WN*, Vol. 1, p. 438. 邦訳, I, 656頁。

一般的購買手段としての日常生活上の貨幣は存在しても、自立する普遍的価値形態としての貨幣は存在しない。存在するのは、貨幣形態ではなく、貨幣の価値であり、購買力能をもつ諸商品である。そして、商品と商品との交換関係である。



スミスは社会的交換関係その内にもつ商品の交換価値に注目する。商品素材は腐る富であるが、交換価値は自然的腐朽性とは対立する純粹社会関係であり、不滅の富であることを欲している。重商主義は価値の不滅性を価値形態にもとめたのであるが、スミスはそれを価値の運動そのものにもとめる。価値の運動、それは再生産過程である。このことは彼の重商主義批判で示唆される。

「一商人の全資本が、貨幣を手に入れるのに充当される滅失しやすい財貨だというばあいによくある。けれども、一国がその近隣諸国から金銀を購買するためいつも充当しうるのは、その国の土地と労働の年々の生産物のごく一小部分にすぎない。その圧倒的大部分は、この国民のあいだで流通し消費されるのであって、海外へ送られる剰余部分でさえ、その大部分は、総じて他の外国財貨の購買のために充当されているのである。それゆえ、たとえ金銀は、それらを購買するのに充当される財貨と交換にでなければ手に入れられぬとはいえ、その国民を一文なしにしてしまうことはなかろう。もっとも、その国民は、若干の損失や不便をこうむるかも知れないし、また貨幣に代位するために必要な便法を講ぜざるをえなくなるであろう。それにしても、その国民の土地と労働の年々の生産物は、平常と同一またはほとんどまったく同一であろう、というのは、平常と同一またはほとんどまったく同一の消費可能な資本がこの生産物を維持するのに使用されるだろうからである。そして、たとえ財貨は、必ずしもつねに貨幣が財貨をひきよせるほどたやすく貨幣をひきよせぬにしても、

長期間をとってみれば、貨幣が財貨をひきよせるのにくらべてさえ、より必然的に財貨は貨幣をひきよせる。財貨は貨幣を購買する以外の多くの他の目的に役だつが、貨幣は財貨を購買する以外なんの役にもたない。それゆえ、貨幣は必然的に財貨のあとを追うが、財貨は、必ずしもつねに、または必ずしも必然的に、貨幣のあとを追うとはかぎらない。財貨を買う人は必ずしもつねにふたたびそれを売るつもりではなくて、それを使用するかまたは消費するためにそうするばあいがしばしばあるが、それを売る人はつねにふたたびそれを買うつもりでそうするのである。……人々が貨幣をほしがるのは貨幣そのものがほしいからではなくて、それで購買しうるのがほしいからである。<sup>(84)</sup>

スミスが単純再生産の立場にあることは明白である。

$$P \cdots W' \left\{ \begin{array}{l} W \\ G' \\ w \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} G \\ g \end{array} \right\} - W < \frac{A}{P_m} \cdots P, \quad \text{スミスが依拠するのはこの生産資本}$$

循環視座である。商品の貨幣性格は、商品が消費されても消滅するのではなく、生産的消費と流通の継続的反复のなかで文字どおり確固たるものとなる。スミスに価値形態論がないことの積極的意義は価値運動論としての再生産論が彼にあることである。

#### (4) 解 読

いままで長々と予備的研究を続けてきたが、これからスミス生産的労働論の本文にはいる。本文で積極的になされる原論的展開はスミスによるいままでの経済学史的研究の総括であることが了解されるだろう。したがって、本文の解読は容易である。生産的労働論の認識視座をさらにたしかめることに必要な論点のみをとりあげる。本文は第2篇第3章の冒頭である。

「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を生まぬ別の部類のものとがある。前者は価値を生産するのであるから、これを生産的労働とよび、後者はこれを不生産的労働とよんでさしつか<sup>(85)</sup>

<sup>(84)</sup> WN, Vol. 1, p. 439. 邦訳, I, 657-658頁。

<sup>(85)</sup> スミスじしんここに注をつけて言う。「ひじょうに博識で創意に富んだあるフランスの著者たちは、これらのことばをちがった意味に用いている。第4篇の最後の章で、わたしはかれらの意味が不適當だということを明らかにしようと努力するつもりである。」

えない。そこで、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反し、召使の労働はどのような価値も付加しない。製造工は自分の賃銀を自分の親方から前貸してもらってはいるけれども、こういう賃銀の価値は、一般に、自分が労働を加えた対象の増大した価値のうちに利潤をともなって回収されるのであるから、実は親方にはなんの費用もかからない。ところが、召使の生活維持費はけっして回収されないのである。人は多数の製造工を雇傭することによって富み、多数の召使を扶養することによってまずくなる。とはいえ、後者の労働もその価値をもっており、前者のそれと同じように当然その報酬をうけるべきものである。<sup>(36)</sup>しかしながら、製造工の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品にみずからを固定し実現するのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだは存続する。それは、いわば、なにか他のばあい必要に応じて使用されるために、貯蔵され貯えられる一定量の労働である。この対象、またはそれと同じことであるが、この対象の価格は、あとになってから、はじめにそれを生産したのと等量の労働を必要に応じて活動させることができる。これに反し、召使の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品にみずからを固定したり実現したりはしない。かれのサービスは、一般にそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまうのであって、あとになってそれとひきかえに等量のサービスを獲得しうるある痕跡、つまり価値をその背後にのこすことがめったにないのである。<sup>(37)</sup>

もはや分析する必要はないであろう。本質規定と現象規定の矛盾しあう二つの生産的労働規定、そういうものはスミスにはもともとないのだ。単純再生産

<sup>(36)</sup> 本文でのスミスの焦点が賃金に投下された資本価値の動動にあることからみて、この文章は厳密にはつぎのように訳されるべきだろう。「とはいえ、前者のそれと同じように、後者の労働はその価値をもち、その報酬にあたいする。」原文はつぎのとおりである。The labour of the latter, however, has its value, and deserves its reward as well as that of the former.

<sup>(37)</sup> WN, Vol. 1, p. 330. 邦訳, I, 522-523頁。

過程という大きな視座のなかの個別的視角からすれば、たしかに、区別される諸規定はある。だが明白なことだが、区別は統一を前提とし、統一をつくる。スミスははじめから、賃銀と利潤の合計である追加価値を生産する労働を、つまり直接的生産過程での新価値形成労働を、それら所得価値の同時的消費という行為に並行させて考察している。スミスが対象とする生産的労働はただ一つ、再生産過程のなかにおかれて直接には生産過程で追加価値を生産する労働である。または、追加価値を生産することにおいて過程的価値としての資本を生産する労働である。

まずスミスは、重商主義の科学的核心であり、ケネーも事実上認めていたことから出発する。生産的労働は、賃金と利潤の和に等しい追加価値としての「価値を生産する労働」である。この「価値」には当然ではあるが剰余価値としての利潤がふくまれている。この意味で生産的労働は資本家が投下した貨幣を資本に転化させている。だがスミスの生産的労働は、直接的生産過程の次元にかぎっても、剰余価値生産にのみ限定されない。それは分配関係としての生産関係を表現する追加価値を、「実質的収入」という富を、資本家のために生産する。それは近代社会の基本的二大階級の分配範疇（賃金と利潤）を生産することによって、社会を支える。いわゆる第1規定はたんなる物やたんなる価値を生産する労働ではない。それは、総体的にみれば、年価値生産物の流通・分配・消費にかかわるものである。スミスはこのことを、年価値生産物の一構成要素である賃金価値・資本家が投下する可変資本価値、これの運動にとくに焦点をあてて考察している。

労働者は資本家から「前貸」された賃金価値を個人的消費物購入にあてる。その賃金価値は他の資本家の手に渡り、購入された消費物は労働者によって個人的に消費されるから、この前貸された価値は消滅する。しかし、その消費と同じ期間に労働者は生産過程で追加価値を生産する。追加価値をふくんだ資本制的商品が販売されて資本家の手には最初に投下した賃金価値が「回収」される。一方で消滅する価値が他方では回復される。これをみてスミスは言う。「生産的労働者は〔生産的労働者を維持するのに使用された〕その価値を利潤

とともに再生産する」。<sup>(38)</sup>ところで、利潤も、労働者に前貸しされた賃金の運動とおなじ論理で回収・再生産されている。回収されるべき利潤価値は当の生産過程と同一の期間にその全額が資本家によって消費されている。スミスはここでは明示していないが、自己の消費物購入のためにあてるこの利潤は、資本家が自分自身にたいして前払いしたものであろう。<sup>(39)</sup>

$$\text{「前払」} \left\{ \begin{array}{l} L \\ G \\ (g) \end{array} \right\} \begin{array}{l} \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \end{array} \begin{array}{l} G \\ W \\ (w) \end{array} \begin{array}{l} \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \end{array} \begin{array}{l} W \\ (=A) \\ \dots\dots P \end{array} \begin{array}{l} \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \end{array} \begin{array}{l} W' \\ \dots\dots W' \\ \dots\dots W' \end{array} \begin{array}{l} \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \end{array} \begin{array}{l} G \\ G' \\ K \end{array} \left\{ \begin{array}{l} G \\ (g) \end{array} \right\} \text{「回収」} \text{。前払価値のう}$$

ちでとくに賃金に投下された資本価値の運動をみれば、資本と交換される生産的労働とは、前払いされた賃金と利潤の価値を生産して次の再生産のための資本価値を回収する労働である。生産と消費をそのうちにふくんだ価値の「前払」—「回収」、この価値の運動のなかで生産的労働を凝視すればどうなるか。

$$\left\{ \begin{array}{l} A \\ (P_m) \end{array} \right\} P \dots\dots W' \left\{ \begin{array}{l} W \\ G' \\ (w) \end{array} \right\} \begin{array}{l} \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \end{array} \begin{array}{l} G \\ G' \\ (g) \end{array} \begin{array}{l} \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \\ \xrightarrow{\quad} \end{array} \begin{array}{l} W \\ W \\ (w) \end{array} \left\{ \begin{array}{l} A \\ (P_m) \end{array} \right\} P, \text{この再生産過程の}$$

うちの  $P \dots\dots W - G - W(A)$  の部分をみよ。生産的労働者によって生産された商品資本  $W'$  のうちの資本価値  $W$  は、正常な資本制的生産のためには最低限、資本家によって個人的に消費されてはならず、聖別してとっておかれねばならない価値部分である。資本価値  $W$  はいったん流通にはいって貨幣形態をとったうえで流通から身をひく。しかし、貨幣形態のなかに貯蔵された資本価値が流通に再び関係せずに退蔵されたままでは、それはたんなる金銀物質であって、価値ではない。貨幣が価値としてのおのれの性格を保持するためには再び流通にはいって、生産的労働者を購買しなければならない。生産的労働者は価値形成労働という役立ちそのものを自己の性質としている。以上の  $P \dots\dots W - G - W(A)$  運動のなかで把握された生産的労働が、資本価値存続労働であり、いわゆる第

<sup>(38)</sup> *WN*, Vol. 1, p. 350. 邦訳, I, 549頁。Cf., *WN*, Vol. 1, pp. 338, 339. 邦訳, I, 533, 535頁。

<sup>(39)</sup> スミスにおいても前払利潤規定がなされる理論的必然性については拙稿を参照されたい。「スミス価値論における社会認識の構造」(中)(下)『商学討究』第29巻第1号・同第3号。

2規定である。<sup>(40)</sup>生産的労働は賃金に等価の資本価値を「商品」Wに対象化する。<sup>(41)</sup>この商品はもちろん消費されたり腐ったりする物的「対象」ではない。消費物ではなくて「すくなくともしばらくのあいだは存続する」耐久的对象、「対象の価格」、「あとになってからはじめにそれを生産したのと等量の労働を必要に応じて活動させることができる」対象、これは、次の資本制の生産に必要な生産的労働者を購買する価値に等しい商品資本である。この資本価値は体制的には不滅である。生産的労働は感覺的对象たる商品に自己を固定化するのではなく、不滅的価値としての資本を生産することで自己表現する。商品資本Wを生産するのに投下された労働量と、その商品資本Wが後継再生産に必要な生産的労働者を購買しうる量とは、等しい。P...W—G—W(A)の単純再生産過程では、「商品」Wの交換価値・支配労働量はその投下労働量に等しい。たしかにスミスは商品と商品資本との区別を自覚的にしていない。だが生産的労働がたんなる物的商品を生産するものでないことは明らかである。スミスは、資本としての・過程的価値としての価値の運動様態を表現するために、価値の骨化した貨幣よりも、経済的形態変換そのものを表象させる流通資本的「商品」を選んだのではないだろうか。また、スミスの「商品」はそのうちに不滅的な交換価値性格を内在させるものであった。スミスの生産的労働は「あとになってそれとひきかえに等量の労働を獲得しうるある永続的な対象」<sup>(42)</sup>を生産しなければならないのであり、「あとになってそれとひきかえに等量のサービスを獲得しうるある痕跡つまり価値をその背後にのこす」労働でなければならないのである。<sup>(43)</sup>この生産的労働規定と対比的な労働が召使の労働である。召使の労働は、それじしんが価値をもつ賃労働であり、物的財やサービスを主人のために生産するという点では、生産的労働とおなじである。だが召使の労働は、主人に

(40) 価値存続労働の理論的意義を発掘したのは内田義彦である。同氏『経済学の生誕』321 - 322頁。

(41) この点はつぎの箇所からも補強される。WN, Vol. 1, p. 362, 邦訳, I, 564頁。

(42) WN, Vol. 1, p. 330. 邦訳, I, 523頁。

(43) 第2規定・価値存続労働が重商主義的富=貨幣観批判であることについてはつぎのものが参照されるべきである。富塚『蓄積論研究』63 - 73頁, 平田『経済科学の創造』295 - 297頁。

としての使用価値である財やサービスを生産しても、召使自身の賃金価値を主人のために資本価値として再生することはない。召使の労働は労働力購買力をもつ資本価値を生産しないから、不生産的労働である。

資本価値存続労働は剰余価値生産労働をふくむ。この意味で生産的労働第2規定は第1規定に合致するとともに、第1規定は第2規定での展開を必要とする。資本制的生産は生産された剰余価値のゆくえを追求することでより具体的全体的に把握される。第2規定は第1規定とまったく別に存在する一つの規定なのではない。また、それは歴史形態的に誤まった内容をもつものでもない。直接的生産過程での第1規定は再生産過程での第2規定にまで高次展開されねばならない。

生産的労働論の認識視座は再生産論にある。スミスの生産的労働論はそれ固有の論理次元を主張するよりも、再生産論に姿態変換すべき内容をもつ。それもいままでの単純再生産を超えて、社会的規模での蓄積と拡大再生産にまで姿態変換すべき内実を孕んでいる。第2規定の生産的労働は個人的消費物の価値に等しい追加価値を個別部門で生産していた。ところでこの第2規定は、社会的再生産過程をすでに研究してきたわれわれにとっては、社会的にはつぎのように表現される。社会の生産部門を構成する生産手段生産部門Ⅰと消費手段生産部門Ⅱの各個別的再生産は、両部門間の流通において現われる構成価格論として総括表象される。社会の全生産的労働（ $P_I + P_{II}$ ）の目的は、社会諸階級が個人的に消費する全消費物 $W'_{II}$ の価値に等しいだけの総追加価値（ $v_I + v_{II} + m_I + m_{II}$ ）を、年々「商品」として再生産することにある。（総賃金価値（ $v_I + v_{II}$ ）が「商品」資本として再生産されることをふくむ。）だが単純再生産は資本制的生産にとって最低限必要な過程であるが、正常な過程ではない。正常な過程は、第1規定の生産的労働が直接的生産過程においてのみでなく、再生産過程からみても年々価値増加していくことにある。つまり、第1規定を蓄積元本生産労働として展開すること、それも社会的な規模で展開すること、これがスミス生産的労働論のこされた課題である。それは、スミス生産的労働論が発展的に解消してゆかねばならない新たな課題である。